

白鷗大学論集 第31巻 第2号

## 研究ノート

# 児童詩少年詩の詩人、吉田瑞穂と山本和夫

— 書簡の紹介を主として —

竹 長 吉 正

Two Poets for Children, Mizuho YOSHIDA and Kazuo YAMAMOTO

— A Collection of 16 Letters from Two Poets —

TAKENAGA Yoshimasa

### 初めに

ここに紹介するのは、詩人にして教育者であった吉田瑞穂（1898－1996）と、詩人にして児童文学作家であった山本和夫（1907－1996）、両者の書簡である。吉田の書簡は佐賀県立図書館、山本の書簡は福井県立図書館にそれぞれ寄贈する予定である。寄贈する前に心覚えのために、ここに公開する次第である。

わたくしが吉田瑞穂を訪ねたのは一九七九年の春であった。それ以来、吉田が亡くなる一九九六年の冬まで約十七年間、親しくさせていただいた。三十歳前半の若者によく付き合ってくれたものだと思う。随分、ぶしつけなことを言ったり、尋ねたりしたが、それでも吉田は囁んで含めるように教え、論してくれた。

また、山本和夫はわたくしの郷里の大先輩であったし、それに、出身高校の先輩でもあったので、初めから、気後れすることなく訪問した。しかし、山本にはペンネーム露木陽子で知られる作家山本藤枝が奥さんとして

竹 長 吉 正

同居されていたから、いささか緊張しないわけにはいかなかった。しかし、わたくしはそれでも、自分を鼓舞して（国分寺）恋ヶ窪の山本宅を訪ねた。思い出すのは、ある日（その日は六月頃だった）、山本宅を訪ね和夫氏と応接間で話をしていると、急にドアが開いた。藤枝さんが買い物から帰ってきたようであり、手にはビニール袋を提げていた。突然、「ほうれ、こんな素晴らしいのがあったのよ！」と言われ、ビニール袋から大きな枇杷の実を取り出された。無邪気なそのそぶりに驚いたが、また、それに応じた和夫氏の「おお、そうか！」というにこやかな笑顔に、わたくしはこの夫婦の、まさに子どものような無邪気な日常を連想した。

また、吉田瑞穂の話に戻るが、彼の家（東京都杉並区）では、娘さんのみどり翠さんが絵を描いておられたのが、印象に残っている。さらに、吉田の家では、郷里の佐賀県から届いたキビナゴを酒の肴にして、いろいろと有明海で遊んだ少年時代の話聞いた。

いずれ、こうした話は回想としてまとめるつもりであるが、今のところは時間がないので、これくらいでやめておく。

吉田瑞穂からの書簡は全十二通、山本和夫からの書簡は全四通である。

### 吉田瑞穂 書簡 全十二

【1】 1979年（昭和54）4月13日消印

杉並南局

60円切手 封書 ボールペン書き

発信 東京都杉並区高円寺南2

吉田瑞穂

宛先 346 埼玉県久喜市吉羽1950

竹長 吉正

先日は失礼いたしました。昨日はおたよりや研究物をいただき、ありがとうございました。

「洋燈」(注①)は、素晴らしい作品だと思います。なお、友達どうしの批評がじつにうまいと思いました。高校生としての高さのあるよい詩でいっぱいです。あまり難解でなく、ほどよい象徴があって、味わいの深い作品揃だと思います。高校生の作った詩集としては日本一ではないでしょうか、と私は考えています。「作文教育の理法」(注②)は高校生のための研究だと思いますが、高校の作文法についてははじめて拝見、とてもりっぱです。そのうちにどんな文章を、どんなにかくかというテーマで、また実践を積んでください。

先は御礼まで。『国文学』(注③)のコピー、ありがとうございます。コピーを見て、かいたことを思い出しました。

#### 注

- ① 「洋燈」 1979年3月刊行の詩集。東京学芸大学附属高等学校大泉校舎学年詩集(高校2年)編集委員会の発行。この詩集については拙著『帰国子女のことばと教育』(三省堂 1984年10月)82-89ページ参照。
- ② 「作文教育の理法」 拙稿「作文教育の理法—帰国子女作文の実態と指導—」(『東京学芸大学附属高等学校大泉校舎 研究紀要』第2集 1978年3月)のこと。この論考の抜刷をわたくしは吉田に進呈した。
- ③ 『国文学』のコピー 『国文学 解釈と教材の研究』(学燈社)第13巻第16号(昭和43年12月臨時増刊)所収の吉田の論考「児童詩コーナー」のこと。子どもの詩三篇について吉田が的確なコメントを記している。当時わたくしは何気なく目にとめた論考であり、それをコピーして吉田に進呈した。

竹 長 吉 正

【2】 1979年（昭和54）5月30日消印

杉並南局

60円切手 封書 ボールペン書き

（※教育出版センター用箋 B判用 22字×17行 1枚

但し、マス目に文字は入れず、自由に記述。

黒ボールペンで書く。）

いよいよ 初夏が来たような気がします。

おかわりありませんか。

さて、先日お話のあった百田宗治先生（注①）の私への序文、本日、コピーをとりましたので、同封します。

私の投書時代のころの詩をまとめて出した「僕の画布」の序文です。厚生閣発行。（昭和7年1月1日発行）

いま、第三少年詩集（注②）の書き足しと、推敲に追われています。

末筆ながら御作専一に祈りあげます。

5月30日

吉田瑞穂

竹長吉正様

※他にコピー1枚（百田宗治の序文）同封

注

① 百田宗治先生の私への序文 吉田の第一詩集『僕の画布』（厚生閣書店 昭和7年1月1日）所収。なお、この詩集には百田のほかに千葉春雄の序文もある。さらに「跋」を橋本康以、「後期」を吉田が書いている。

② 第三少年詩集 吉田には〈1〉『海べの少年期』（理論社 1967年初

版)〈2〉『しおまねきと少年』(教育出版センター 1976年11月)〈3〉『空から来たひと』(理論社 1983年初版)〈4〉『<sup>へさき</sup>舳先に立って』(講談社 1984年7月)〈5〉『〈幼年詩集〉ムラサキガニのつなひき』(けやき書房 1988年2月)〈6〉『〈幼年詩集〉はるおのかきの木』(教育出版センター 1991年11月)等の既刊少年詩集がある。ここで「第三」と述べているのは『空から来たひと』(理論社 1983年初版)を指す。

【3】 1979年(昭和54)6月8日消印

杉並南局

葉書(40円) ボールペン書き

おたよりありがとうございました。

おたのみの原稿(注①)はかくことにします。

「詩の指導について、現場教師にのぞむ」

というような趣旨ですか。

その詩には、児童詩と、少年詩についての二つの意味がありますが、それでいいですか。

少年詩はどちらかという、鑑賞中心で、表現への示唆ということがありますね。

そのへんのことは、「詩」という立場で、現場の教師にのぞみたいことをかいていいですか。

枚数は四〇〇字原稿用紙で六枚くらいでしたかね。お知らせください。  
作品例を入れると少し長くなりそうですが? 6月8日

注

① おたのみの原稿 詩研究会の会編『現代詩への架橋』第四輯(昭和

竹 長 吉 正

55年1月)所収の吉田瑞穂「児童詩教育について」のこと。

【4】 1979年(昭和54)6月21日消印

杉並南局

葉書(40円) ボールペン書き

このごろの暑さはひどいですね。

おかわりありませんか。

さて、先日、おひきうけしました原稿(注①)を書こうと思って構想を考えましたが、どうもはっきりしません。原稿の趣旨について、原稿の内容についてもういちど電話をください。

私は第三少年詩集の書き足しと推敲にとりかかりましたが、暑くて、うまくいきません。

末筆ながら、御体御大切に。

先ずはおたのみまで。

6月21日

注

① おひきうけしました原稿 同年6月8日の葉書にある「おたのみの原稿」のこと。

【5】 1979年(昭和54)7月31日消印

杉並南局

60円切手 封書 ボールペン書き

(※以下、市販原稿用紙B4の半分に書く。)

いよいよ暑くなりました。おかわりありませんか。

さて、おたのみの原稿、同封します。枚数が6枚だったので、例に挙げる詩作品をはぶきました。

しかし、教師への「態度」のことは強調（注①）しました。これは今日、日本のすべての教師に言いたいことです。

イデオロギー的生活綴方は、私はとりませんが、生活綴方の精神は大切にしなければならぬと思います。

私は明日から3日間、高野山小学校の教育の指導にいきます。ことして12年めです。かくこと（表現）を中心にした学級経営の学校です。

『解釈』6月号を送ってきました。おもしろく拝見しました。末筆ながら御体御大切に。

7月31日 吉田瑞穂

竹長吉正様

注

- ① 教師への「態度」のことは強調 吉田は論考「児童詩教育について―現場の教師に望む―」（『現代詩への架橋』第四輯 昭和55年1月）の中で、次のように述べている。「（引用者補記：詩を読む、詩を書くということは）指導要領にあるからとか、教科書にのせてあるからやるといような、あわれな態度でなく、子供への愛情をもって、子供をかしこく育てるという教育観に基づいて、すべての教師が足なみをそろえたものだと思う。」

【6】 1983年（昭和58）9月13日消印

杉並南局

60円切手 封書 ポールペン書き

竹 長 吉 正

(※以下、コクヨ製のクイーン用箋に書く。)

きびしかった残暑も、やや、やわらぎました。

おかわりありませんか。

さて、私の左の足のモモのヘルペスもすっかり、よくなりました。これから、あちらこちらの作文コンクールの審査で多忙になります。

私の『空から来たひと』(注①)をお贈りしようと思いながら、つい延引してしまいました。本日、お贈りしました。御高評下さい。やや自伝的で、六才のころからはじまった感動の記録の詩化です。

この詩集を故湯川博士の奥さん(注②)に贈ったら、うれしいとおたよりをいただきました。コピーして同封します。いろんな文学賞よりうれしい宝です。

これから郵政省の手紙コンクールや、小学館のコンクール審査がはじまり、多忙な秋になります。

末筆ながら御体專一に祈りあげます。

9月13日 吉田瑞穂

竹長様

注

① 『空から来たひと』 吉田の少年詩集。1983年、理論社より刊行。

② 故湯川博士の奥さん 故湯川秀樹博士の夫人スミ。

吉田宛の手紙で夫人は『空から来たひと』が湯川秀樹のことを取り上げていることにふれ、「……このように主人のことを児童たちにしらせて下さいまして、さぞ亡き主人もどんなにか喜んでおることでしょう。早速、孫たちにも読ませ、主人の仏前に供えるつもりであります。先生の色々の仰せは、次の時代をになう少年たちに大変な良い影響をあたえる事と信じます。……」とある。



【7】 1983年（昭和58）9月13日消印

新高円寺駅前局

書籍小包 切手  $120 + 120 + 10 = 250$  円

〒346 埼玉県久喜市東三

竹長 吉正様

東京杉並区 高円寺南二

吉田 瑞穂

※少年詩集『空から来たひと』封入。

贈呈の短札あり。

【8】 1983年（昭和58）10月5日消印

杉並南局

60円切手 封書 ボールペン書き

（住所 氏名）同前

※クイーン製便せん二枚に記す。

別に 湯川スミ夫人の手紙コピー添付。

お手紙拝見いたしました。

お問い合わせの件

1. ねんぼう（注①）……いちばん上等のねんぼうは、グミの木を使いました。直径六センチぐらい、長さ三〇センチぐらいの木の棒で、先端はとがらせておく。その棒を使ってお互いの棒をとばすあそび。ジャンケンで負けたほうが先に田んぼ（稲刈りあと）にうちこむ。勝った

竹 長 吉 正

ほうがその棒の側に打ち込んで相手の棒をとばすあそびです。

2. 『小学生 詩の導き方』……この本は西荻書店から昭和二十五年十二月十日発行。発行者は竹下直之（この人は戦前の文部省役人）。この本屋の所在は杉並区西荻窪二ノ九でしたが、今はあるかないかわかりません。絶版の本です。私は一冊、持っています。

3. 八並誠一……この人は十年以上、昔、なくなりました。杉並区若杉小学校教頭の時、死亡。死亡してから勲章をもらった人です。『ゲロ伯爵詩』という詩集があります。文学的な人で、かなり才気のある人でした。私が署名している本は（注②）、何という本ですか。

右、お答えまで。

『空から来たひと』の礼状が、故湯川博士の奥様からきた（注③）ので、コピーして同封します。

私は次の詩集を出すために、もはや十二篇かきました。本年中にはかきあげるつもりですが――。

教師むきの詩論の本は、そのあとでかくつもりです。

末筆ながら御体專一に祈りあげます。

拾月五日 吉田瑞穂

竹長吉正様

〈注〉

- ① ねんぼう 『空から来たひと』所収の詩「ねん棒」の中に出てくることば。ねんぎともいう。
- ② 私が署名している本 吉田瑞穂著の『小学生 詩の導き方』。この本に「八並誠一様 吉田瑞穂」の署名がある。竹長が古書店で見つけ、購入した。

- ③ 故湯川博士の奥様からきた 前掲の封書（一九八三年九月十三日）  
に同封されていたものと同じ。前回送ったものを忘れていたのであろう。  
吉田はこの夫人からの手紙がよほどうれしかったようだ。

【9】 1984年（昭和59）6月11日消印

杉並南局

60円切手 封書 ボールペン書き

※宛先 受信地、発信地

（住所 氏名）同前。

朝日23日夕刊のこと（注①）、うれしく拝見しました。

おたよりとコピー拝見いたしました。

ますます御研究のようで、うれしく思います。

さて、おたずねの件について申し上げます。

〈1〉鑑賞指導のポイント

コピーの作品（注②）が小三ですから、小三を中心に申し上げます。  
そのために、最近発見した作品を示し、具体的に説明したいと思います。

〔作品例〕 おかあさん

毛塚<sup>けづか</sup>康寛（杉並第九小、三年）

ガッチャン ガッチャン

おかあさんが

タイプのきかいで 字をうっている

会社からもらってきたしごた

おにみたいなこわい顔で

竹 長 吉 正

いんさつ紙を  
じっと みつめている

ぼくが  
「おかあさん」  
といったら  
ぎろっと こっちをむく  
そして  
「あとで」  
といって にこっとした

また おにみたいな顔で  
しごとを つづけている

◎ 鑑賞指導のポイント

1. 詩のころ（詩的感覚）を把握させる

この詩では、しんけんに仕事にうちこむ母を感じとっているところをよみとらせる。おにみたいな顔で仕事にとりくむ母を認識している作者の態度をよみとらせる。

2. 表現の仕方を把握させる

- （1）〈第一連〉おかあさんの仕事に関してどんなことばで、どのようにあらわしているか。作者の視覚、聴覚がどのようなことばで表現されているかを把握させる。
- （2）〈第二連〉母のようすをよみとる……おにみたいなこわい顔で、いんさつ紙をじっとみつめている。
- （3）〈第三連〉母のきびしい、きついことばと、やさしい心のあらわし方をよみとる。
- （4）〈第四連〉母の働くようすのあらわし方をよみとり、また、

母のしんけんな態度にうたれた時の作者の心を想像する。

### 3. 表現への示唆

子どもたちの日常の生活態度を養う。

ふだんから見たり聞いたり考えたりする生活をもつように示唆する。(教師はやさしいことばで説明してやること。)

## ◎ 創作指導のポイント

1. 感動したことを、どんな順序でかいているか。例示したこの作品（「おかあさん」）では見た順序にかいている。また、聞いて考えた順序にかいている。このように問いを発して、この詩の作品としての構成をよみとらせる。
2. ある時、ある場所で作者が真実に感じたことを、自分のことばでかいていることに気づかせる。これは概念くださきをすることである。このことの重要性をわからせる。

次に、大石喜四郎君の詩「春」「草の芽」について  
質問事項に答えます。

### 1. 詩「春」の4行目

——とよの下の梅の木も

「とよ」とい（雨どい）の方言だと思います。

### 2. 詩「草の芽」の9行目

——あつかい春を思ひ出した

「あつかい春」は「暖かい春」のことと思います。

私は七月末、講談社から詩集『<sup>へさき</sup>舐先に立って』（注③）を出すことになりました。第四少年詩集です。

竹 長 吉 正

〈注〉

- ①朝日２３日夕刊のこと 『朝日新聞夕刊』一九八四年・昭和５９年五月二十三日（水曜日）の記事『新人国記 ‘８４ 佐賀県①』のトップに吉田が２８行にわたり取り上げられた。
- ②コピーの作品 竹長が封書（同年６月１１日付）に入れた小三児童大石喜四郎の詩「春」「草の芽」のコピー。『尋三 教材王国』昭和十四年三月号所収の吉田瑞穂「児童詩労作読本 三月」で、これらの詩が取り上げられている。

### 春

雪がつもつてゐても  
春が近づいてくる。  
川ばたの柳の芽、竹の子のやうだ。  
とよの下の梅の木も  
花がさいてゐる。  
雨だれがぼたんぼたんおちて  
今日はあつたかい。  
ゆきは川をうめてゐるが  
雪の下に水の音がきこえて  
春が近づいてゐるんだ。

### 草の芽

雪かきしてゐると、  
せ中に雪がつもる。  
赤くいたくなつた手で

のき下の石をおこすと  
白い草の芽、  
まがつて出てみた。  
雪かきやめて  
ぼくは  
あつかい春を思ひ出した。

③詩集『舳先に立って』 この詩集は一九八四年七月、講談社から刊行された。

【10】 1984年（昭和59）6月16日消印

杉並南局

葉書（40円） ボールペン書き

おたより、ありがとうございました。

私の返信を喜んでいただき、うれしく思います。

さて、詩集の作品の解説の件（注①）はありがたく思うのですが、私の詩集（注②）は創作児童文学のシリーズの中に位置づけられており、解説的なものは編集上、入れないことになっています。あとがきもなるべくかんたんなものです。

あなたは特に私の詩について研究してもらい、うれしく思っていますが、今度の詩集のことなど、適当な雑誌にでも書いて下さいませんか。教育出版センターのクオタリーにはいかがですか。そして、現在の少年詩には少年の生活感情をはなれたり、コトバが象徴的でありすぎたり、コトバあそび的なものもありますから、正しい方向へ御研究の指針を示して下さい。

右のような事情ですから、何とぞよろしく――

竹 長 吉 正

〈注〉

- ①解説の件      吉田が出す詩集の解説を書きましようかと竹長が申し出たこと。
- ②私の詩集      この時、出版の途上にあった吉田の詩集『触先に立って』を指す。

【11】 1984年（昭和59）11月1日消印

杉並南局

60円切手 封書

作品批評文（400字詰コクヨ A4サイズ原稿用紙2枚）同封。

おたのみの原稿（注①）、おくれてすみません。

このごろ、いろいろな仕事で多忙のため、やっと本日、書きあげてお送りします。

私の批評文（注②）は当たっているかわかりませんが、何回か書き直し、やっとまとまりました。

明日は講談社の「野間児童文学賞」の受賞式に参加します。私の『触先に立って』という詩集は候補にあがっていたそうですが、最後に落ちたそうです。

私は賞めあてでなく、書きたいものを書いて、広く少年たちに読んでもらえればよいと思っています。

末筆ながら、御体御大切に、ご活躍下さい。

十一月一日      吉田瑞穂

竹長吉正様

〈注〉



①おたのみの原稿 竹長吉正の著『児童文学の表現構造 どう読むか、どう書くか』(教育出版センター 一九八六年四月)所収、吉田瑞穂稿「〈作品評〉幼年をたのしませる空想の世界」(同前書一八五ページ)。

②私の批評文 前注①の文で吉田は、竹長の創作童話「たのしいクジラつり」と「ベッキー・ホワイトとおばけイチゴ」を批評している。なお、単行本に収録する際、編集の都合上、原稿末尾の次の部分を省略した。「……さて、このような出色の新しい童話を創作した黒沢氏(※当初、竹長は童話作品で黒沢<sup>みつお</sup>光大というペンネームを用いていた)には童話作品の源流として、詩と文学論の探求があったからではないかと思う。

氏はもと、成人の詩や少年詩の研究はもとより、児童文学の造詣が深かったのであるが、詩雑誌『きりん』の詩から児童文学へはいつていかれた灰谷健次郎氏のあゆみにどこか似ているように思う。

現在、黒沢氏はイギリスのマーガレット・マーシャルの児童文学論に心をひかれているようだが、これからますます、独自の児童文学作品を生み出されるよう期待している。」

【12】 1985年(昭和60)3月26日消印

杉並南局

葉書 (40円) ボールペン書き

やっと春らしくなってきました。

いつかの童話集(注①)はどうなりましたか (※この一文は後で赤ボールペンで挿入したらしい)

おかわりありませんか。

さて本日、教育出版センターから『実践国語教育情報』が送られてきました。

あなたの書評(注②)を拝見し、とてもうれしくなりました。なお、御

竹 長 吉 正

批評の新しさに感心しました。あちらこちらの新聞や雑誌に『触先に立って』の批評が出ましたが、あなたの書評にいちばん感心しました。

この詩集では少年後期の生活感情を書きましたので、今は七才から九才までの幼年感情を（注③）書いています。

少年詩は現在のところ、国語人の関心がうすいようです。ぜひ、あなたのすぐれた識見をもって『実践国語』（注④）誌上で、少年詩を読ませることも大事だということを評論して下さい。

しかし、理論社から出した『海べの少年期』は昨年、十八版になりましたので、じっさいはよく読まれているのかもしれませんが。おくれているのは先生がた（注⑤）ですかね？

国語教育学者でいちばん、少年文学に理解のあるあなたが大いに活躍されるよう祈念しています。

先ずは御礼まで。

〈注〉

- ①いつかの童話集　黒沢光大の童話集は当初の計画を変更し、「ペンギン・ペン太郎」「たのしいクジラつり」「ベッキー・ホワイトとおぼけイチゴ」の三篇を竹長の著『児童文学の表現構造』（教育出版センター 一九八六年四月）に収めた。
- ②あなたの書評　竹長吉正の稿「〈新刊紹介〉吉田瑞穂著少年詩集『触先に立って』」（『月刊実践国語教育情報』一九八五年四月号）。
- ③七才から九才までの幼年感情を　吉田はこの後、二冊の幼年詩集『ムラサキガニのつなひき』（けやき書房 一九八八年二月）『はるおのかきの木』（教育出版センター 一九九一年十一月）を出版した。
- ④『実践国語』　正確な誌名は『月刊実践国語教育情報』であり、教育出版センター発行の国語教育雑誌。
- ⑤おくれているのは先生がた　吉田は少年詩集の読者が少ないことをなげいている。たしかに当時も現在（二〇一七年）もその傾向は変わらな

い。『海への少年期』が十八版と版を重ねたことに吉田はやや安堵しているが、それは町の図書館や学校の図書館が購入しているからであり、大人（教師や子どもの親）や子どもが自ら少年詩集を手にとって読むということはほとんど期待できない。それに、この場合、少年詩集の重版の部数が童話や絵本のそれに比べて格段に少ないのである。吉田は後日、印税の支払われる時、それを知ることになる。

山本和夫 書簡 全四

【1】 1984年（昭和59）10月2日 12時－18時 国分寺局消印  
40円葉書（ブルーブラックインク 万年筆書き5行）

東京都国分寺市西恋ヶ窪三

山本和夫 より

346 埼玉県久喜市東3

竹長吉正 へ

拝復、ハガキ拝見しました。どんどん書いて下さい。

お出かけ下さる日は、朝、私の都合を聞いてからにしてください。ぶらりと出て留守をしますから。

【2】 1984年（昭和59）12月1日 6時－12時 国分寺局消印  
（同前 住所、氏名） 60円切手、封書  
（ブルーブラックインキ 万年筆使用）

竹 長 吉 正

啓、ハガキ拝見。

正月には、ふるさとに帰省される由。

ふるさとの“虹”をじっくりと見てきて下さい。

私は、急に、この正月は帰省しないことになりました。ふるさとの連中が、来京することになったのです。ゆうべ、電話できましたのです。

あなたのハガキで、あるいは、ふるさとの家へ来訪されるかとも思い、あわてて、この手紙を書いています。

来訪は、夏にして下さい。

○

あなたの吉田瑞穂論で、ちょっと気になりました。

吉田瑞穂の詩は、

◎詩人の詩か、

◎教師の詩か。

あなたは、どちらだと思えますか。

(虹を眺めながら、じっくりと考えて下さい。)

今日のあなたにとって、この分析は重大だと思えます。

あなたは、まだ、分析していないようです。

お会いして、万々。

山本

十二月一日

竹長様

【3】 1985年（昭和60）5月2日 6時－12時 国分寺局消印

（同前 住所、氏名）

40円切手 絵葉書

（レオナルド・ダ・ビンチ素描展） 黒インク、万年筆

啓、花いっぱい季節。

「風」95（注①）、のあなたのほくに関するエッセイ。ほくが、あなたの目に、こう映っているのかな。楽しく想像しました。どうも、どうも。

〈注〉

①「風」95 詩誌『風』第95号（1985年4月）に竹長はエッセイ「〈詩論の螺旋〉子どもと詩人（5） 山本和夫」を執筆した。

【4】1986年（昭和61）9月15日 6時－12時 国分寺局消印  
（同前 住所、氏名）  
60円切手 封書 毛筆

啓、秋味といえば、北海道では、鮭のことだが、（最近の）武蔵野では、梨のことではないだろうかと思う。

美味しい武蔵野の秋味、どうもありがとう。

お礼申します。

山本和夫

9・11

竹長様

#### 〔附記〕

吉田瑞穂及び山本和夫とわたくしの関係について、詳細は拙稿「凡庸な詩人の勝利と敗北」（『白鷗大学論集』第28巻第1号 2013年9月）に於いて記しているので、そちらも参照していただけたら幸いである。

（本学教育学部教授）